

韓国における緑色成長政策の実体と課題

朴 永吉

キーワード： 緑色成長、持続可能発展論、生態近代化論、
緑色成長指標、緑色ニューディール、

1. 研究の背景と目的

2008年8月15日、韓国は「低炭素・緑色成長」を新たな国家ビジョンとして提唱した。その後、緑色成長政策は力強く急速に推し進められている。この緑色成長は、持続可能発展論より具体的且つ途上国と先進国両方に適用可能な概念になり得る期待から、国際社会の中で注目を集めている。国連環境計画(UNEP)は、UN世界緑色経済戦略事業(GED)の初めての国家報告書(2010.4)として「韓国の緑色成長報告書」を出し、韓国の緑色成長政策を世界の模範例として褒め称えた。ただし、その報告書は、韓国の緑色成長に向けた取り組みを紹介し、国際議論の注意を喚起する程度のものに留まっている。緑色成長ビジョンの提唱から4年が経っている現在、緑色成長政策を振り返り、それはどのようなものだったのか、その本質を明らかにし、今後の課題について考察する。

2. 研究方法

まず、韓国における緑色成長概念を批判的に検討する。韓国政府による緑色成長の定義や、その緑色成長を持続可能発展論と生態近代化論と照らし合わせ、緑色成長概念の特徴を垣間見る。そして、韓国では緑色成長の名の下で推し進められている政策にはどのようなものがあり、韓国の緑色成長の水準はどうなっているのかを概観して緑色成長政策に対する理解を深める。その後、緑色成長概念や緑色成長政策の現状から見られた特徴の観点に立ち、韓国における緑色成長政策の問題を指摘しつつ今後の課題について考察する。

3. 韓国における緑色成長の課題

韓国の緑色成長は、成長至上主義的考え方に囚われている。経済成長に重点が偏ったあまり、原子力は低炭素であるだけで「緑色」の勳章が与えられ、放射性廃棄物処理の問題には目を閉じ、原子力を拡大していく方針である。その分、再生可能エネルギーに対する関心は薄く、その分類においても国際的には再生可能エネルギーとして認められないものも含まれ、経済の論理に支配されている。一方で、環境問題を生じさせてしまう社会構造変革への観点はない。現存の体制は維持したまま、経済的利益を増やすことばかりに熱心である。韓国はすでに資源やエネルギーの多消費構造を有しているにも関わらず、その構造を正そうとはせず、むしろ更なる消費の増加を容認してしまっている。結局、必然的に「技術開発」が緑色成長のカギを握るようになる。しかし、資源・エネルギー消費の増加を容認したままでは、効率のみを向上させても、消費増加によって効率効果は相殺してしまうだろう。また、緑色ニューディール事業は、全予算のほとんどを占めているのが既存の大型公共事業や土木工事であり、緑色成長における「緑色」は有名無実なものになっている。特に全予算の1/3を占める4大河川整備事業は、河川にダムを建て、河床を掘る、典型的な生態系破壊例である。それらが緑色の名の下で行われている。

4. 結びに

このような韓国の緑色成長政策を見て問われてくることは、「緑色」とは何かである。現在の緑色成長からは、「成長」したいことは良くわかるが、「緑色」が何を意味しているのかは見えてこない。緑色成長政策の範囲が漠然と広範囲に渡っていることも、「緑色」に対する認識の不明確さが一役買っていると考えられる。何よりも、「緑色」とは何かを明確に究明する必要がある。ただし、政府のみの屁理屈になってはならず、世界的議論と疎通しつつ、韓国社会内での踏み込んだ議論を通じた社会的合意がその土台とならなくてはならない。そのためにでも、現在のようなトップダウン式で推し進められる緑色成長ではなく、全国的な認識の共有と参加を導いていく努力が必要である。そのような過程を通じてこそ、より本質的な問題解決のための社会構造変革の観点も視野に入ってくると考える。そういう意味で、韓国社会が「緑色」について真剣に考える切っ掛けとなった点で、緑色成長は大いに意義ある第一歩になったと言える。